

琉球大学学術リポジトリ

瓜類の栽培技術 (2)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 友寄, 長重, Tomoyose, Choju メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19655

(イ) 自分の物と他人のものとの区別が出来ているかどうか
(ロ) 自分のものを自分でしまつてくせがついていないでしようか。

(ハ) 他人にきかれた事に対して簡潔な返事が出来るでしようか。

又交通規則を覚え気をつけて往來を多く練習は出来て居るでしようか。この場合、三分や五分は遠廻りをしても安全な道を選らばせる事です。

さていよいよ入学しましたら何よりも子供の健康第一と考えて気をつけてやりましよう。

入学当時の子どもは非常に緊張し子供なりに随分気を使つて居りますので大変疲れるはずで、しかし子供は未だ自分の身体を自身で調節する事は出来ませんので、家庭に帰つてから、開放感も手伝つて、よけいに騒ぎがちですが、そのために疲れすぎたり、又夜ねつかれなかつたりする事のないように家族の人で気をつけて、なるだけ身体をやすめるようにして上げると同時に栄養にも充分気を配り、栄養価が高く消化のよいものしかも偏食におちいる事のないように、いろいろな食品をとり合わせて与えるようにしたいものです。幼児の食事は大人と同じものを与えるのも仕方ありませんが出来ましたら大人のものより、淡いお味にし成長期にある、この時代の子供の發育に必要な蛋白、脂肪、無機塩類を特に与えるようにします。

瓜類の栽培技術

(二)

二、南 瓜

1 適地、南瓜が適地としての条件はあまり肥沃でないといふことである。南瓜は割合粗放栽培でもよく成育し、病虫害、乾

このころは毎日に消耗するエネルギーを補つただけではなく、成長のためにも余分に必要としますので三度の食事だけでは充分摂取出来ない場合がありますから、おやつは子供にとつて是非必要なものとなつて来ます。しかしおやつを与えずに次のお食事が進まなかつたりする事のないように。おやつの分量はむつかしく云いますと一日に与える総熱量の15%以下という事になります。とにかく、お食事の影響がないように、種類も蛋白とか脂肪よりも、ビタミン類炭水化物、カルシウム類、それに水分を沢山与えるようにする。よいわけで果物等は一番適当です。

入学当時は出来るだけ早く先生やお友達になじむようにお食事の時や一家団らんの時には学校での出来事をお話させるとか失敗した事があった場合には勇気づけてやつたりして皆が自分の学校に興味を持つている事を感じさせるようにします。子供は学校の事を喜んでお話ししますが、それによつて学校における子供の存在を知る事が出来、正しい指導が出来ると思ひます。学校でなかく友だちと遊べるといふ事は子供の社会性の大きな進歩を示すもので、この方面の重要な実践なのであります。これによつて子どもは対人関係のあり方を自然に算えて来るのです。学校の友達は近隣の友だちと違い、ほぼ同年令で異なつた地域に住んでいる事が多いですから互に言葉を交換し話題も豊富です。それだけ影響される力も一層大きいで

すから時に仲のよい友だちは正しくやらんでやる必要がありません。

勉強も子供が負担に感ずる程、やかましく云うよりは自然に子供が勉強したくなるような環境を作つてやる事の方が大切であるという場合も同じですが他の子供と比較して云う事は、かえつて反感をうえつただけで決して、結果にはなりませんからくれぐれも気をつけるべきだと思います。又学校で接身身についたよ習慣を、知らないうちに家庭でこわしてしまふ場合が多にありますが特にお母様方は子供の気持を尊重して、かつてに「これはこうだ」とおしつけない事です。例えば学校の家庭生活指導で男の子も女の子と同じように家庭的な事に関心を持ち、お掃除やお洗濯に興味を持ちはじめると家に帰つて男の子がするべきではないといわれまふと次第に家庭科に対する興味を失つてしまひます。

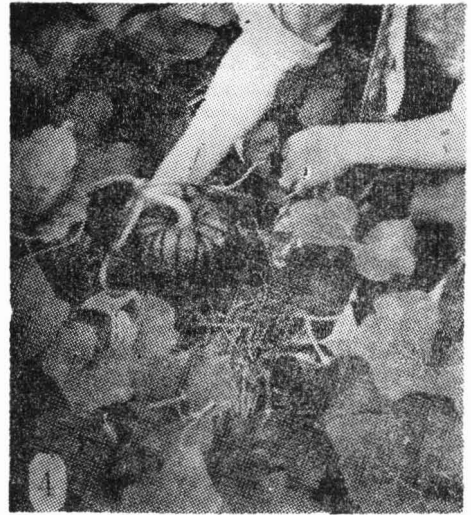
学校でも家庭でも自立の精神を養ふ為、一年生になつて今迄より少し大人になつたという自覚をもたせ、まわりの人もそういう態度で接するように致しましよう。

以上小学校入学前、或いは入学校の注意を案のつた所だけ述べて見ましたが前にも申し上げましたように、入学という大切な時期を不安なく迎え、のびのびと言つて行く事が出来、楽しい学校生活が続けて、けるように気をつけて上げましよう。

(畠 納 澄 子)

あまり肥沃な土地になると、蔓が過度に發育して、花が不良となつて着花率が低くなる。留つた果実もなかなか肥大せず、熟期もおくれる。又そのため蔓がますます發育して、蔓だけ収穫するといふ結果にもなりかねない。

2 遅種適期、日本南瓜はかなりの短日性のものである。即ち日長の短い期間は雌花がよく着生し、段々夜に向つて、日長が長くなるとなかなか雌花が着生しない。それで一月頃より育苗するのが有利であるが、温床設備がなければ無理である。しかし直播するにしても、出来るだけ早く播種し、ビニールなどで上



理想に近い収穫末期の交配一号

を覆うておくといふ、播種適期は、月下包であるが、月上旬から三月下旬迄十月に播種可能である。

西洋南瓜は日の長短にあまり支配されず、長日期でもよく雌花がつく、しかし低温では良く育ち、高温になると、伸長も悪く、着花も悪い。それで早熟栽培によく、中村早生、デリシヤス等の早生系の品種を用いるのが良い。

3 施肥、南瓜は非常に肥料の吸収力が強いので、余り肥料をやる必要はない。特に肥えた所で作る場合には、無肥料でも伸びすぎる傾向があるので、土質、前作に対する施肥量など考えて肥料をやり過ぎないように注意しなければならぬ。

普通の畝の場合でも基肥はなるべく少なくし、堆肥、木灰程度にした方が安全である。蔓の發育をみて、速効性の窒素を加減して施肥し、一番果がとまれば、やゝ肥料を多く与えても安全である。

南瓜は連作の方が楽であるといわれる。連作を続けるとウドンコ病、軟腐病など次第に多くなるが、連作すると發育の程度が予想出来、適当な施肥量を誤らないことになるのが利点である。

施肥の標準量としては、日本種の場合には基肥として反当、堆肥五百貫、硫酸十貫、過石十九貫、塩化加理八貫、追肥として、硫酸十五貫を三回に分施する。在来種の場合には硫酸五貫、過石九五貫、塩化四貫を基肥とし、硫酸七・五貫を三回に分施する。

しかし重ねていうように、土質、前作物の施肥量、摘芯、整枝の集約度に因連して加減すべきである。

4 人工交配、第一花がとまると、蔓の伸長がある程度おさえられ、肥沃土、多肥料の問題も心配せずすむ。之が落ちると折からの高温、多湿、多肥料と加わつて、蔓は猛烈に伸び出し伸びかから又落ちる、落ちるから伸びるという因果関係を繰り返して、蔓の伸長がやつと止つた頃には長日期で雌花があまりなく、結局成績は極めて悪い事になる。どうしても第一花をとめなければならぬ。

早熟栽培をして短日期に栽培すると雌花は早くから速進されるが雄花がない場合が多い。そのような場合にはホルモンをかけてもよく着花するが、西洋西瓜のデリシヤスの系統を一語に植えておくことによつて解決出来る。長日期に初期の花が着くような栽培では、日本南瓜の雄花もつこの必要はない。

人工交配をする場合には時期と時刻が重要な問題である。時期は早いうち程効果が多い。遅くなれば着花週期や高温のため花が負弱になり、落ちるべき花は交配しても落ちるし、留るべき花は放つておいても留る。開花始めから盛期にかけては、花の素質もよく、着花し易いが、雄花が少なく、昆虫も少い、此の時期には交配の効果は高いのである。

又交配には適當な時間がある。高温期には花粉の質が早くから低下するので、実用的には早朝から午前八時迄とされる。雨天の場合でも良く留る。ただ雌花に、雨が入らないようにしなければならぬ。翌日雨と判定される場合には、開花の前日に交配するのが良い。この場合にはなるべく遅い方が着花率は高い。

5 整枝、初期の収量をあげ、早期に収穫を打切つて後作を植付けるためには整枝を行なわなければならぬ。特に油繩では

夏季の高温、乾燥、病害の発生、株の衰弱により後の成績は良くないため、初期の多収をねらうのが有利である。摘芯は親蔓を摘除して、希望する子蔓を出させることであつて、南瓜の種類、畦巾、株間等によつて大要方法が違ふ。

西洋南瓜や在来種の場合には一般に摘芯しない。それは必要な子蔓が希望する位置につかず、又親蔓にも良く着花するからである。それで一般に広積えとし放任するか、畦巾を広く株間を狭くして親すると子蔓を左右に長く伸ばして行くのが良い。この場合不要な子蔓を後で摘芯する。

日本南瓜の親蔓の結実状態は良くない。しかし開花は親蔓が最も早く、早期の収量を望む場合には摘芯せずにおく。

定植の距離は、畑の肥沃度や前作、間作の関係を考慮して考えられるが、更に品種、整枝法と因連して決定される。一般に栽培が集約の場合には密植し、一株当りの蔓数を制限し粗放になるにつれて粗植とし、株当りの蔓数を多くしてゆく。手入れが伴わない場合株間を狭くすることは、徒らに圃場を混乱させ、結果を不良にする。普通日本種では畦巾を五、六尺とするが、發育の旺盛な品種では、株間を広げるより、畦巾を広くした方がよい。株間は一四尺であるが、一、二尺の場合には摘芯せず親蔓及び子蔓二本、三、三尺の場合には子蔓二、三本、三、四尺とすれば子蔓四本位が標準とされている。

子蔓を四本残す摘芯には八葉位残して、その先を指先でつまみとる。上部から勢力の良い子蔓が出て来たら下部の子蔓や後から出てくる子蔓、孫蔓を早目につまみ取る様にする。これら不要蔓の摘除は、交配、除草の度毎に行うようにする。大きくなつてからは摘除は面倒となり、すぐ畑が混乱する。在来種の栽植距離は畦巾一、二尺に、株間八尺で、放任するのが一般である。

三、西 瓜

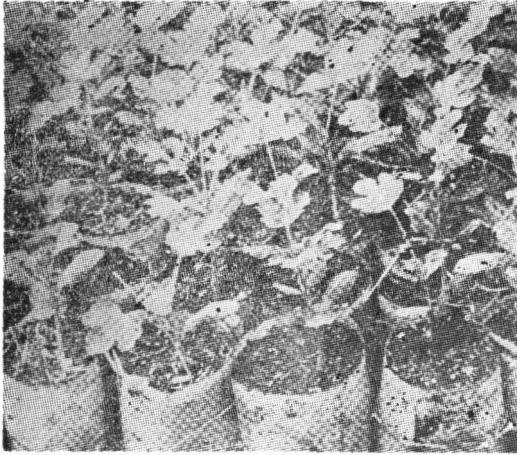
1 人工交配、西瓜の人工交配は大体南瓜に準じ、初期の開花期で晴天で暑い日には午前十時頃迄、なるべく八時頃迄に終る様にする。交配に際しては、雌花にふれない様にし、ごく軽く

雛しへを雌しへの先につけるようにする。

2 施肥、西瓜の肥料は価値な畜糞や油粕などの有機質肥料を使用しなければならぬとされているが、之はこれらの有機質肥料は速効性で連続して肥効を表わすからである。肥効が断続すると着化や果の發育の成順が良くない。それで化学肥料だけで他の作物に与える様な方法ではまずい。肥効に應じ、發育に應じ肥効が平均する様に分施する事を工夫しなければならぬ。しかし慣れない内は化学肥料だけに頼る事は不安である。それで油粕や魚肥を千乃至二千貫位与え、他の肥料を化学肥料で与える事が望ましい。

化学肥料で与える場合には施肥の時期とその量をよく考える事が必要である。西瓜は南瓜に似て、蔓の發育が適宜の場合に着果が良く、余り急速に蔓を伸ばしたり、發育が非常に貧弱な場合には果が着き難い。したがって化学肥料を施す場合には、第一果が着花した日早速施肥をする必要がある。第一番果が着

接小して本葉が十二枚発生したスイカの苗



富研の結果状況

果したら再び追肥を行い、果室の發育を図る。施肥の一例を示すと次の如くである。

基肥 堆肥五〇〇貫、油粕十貫、木灰十五貫、硫酸三貫、過石五貫、第一回追肥、硫酸三貫、過石五貫、木灰五貫、第二回油粕十貫、硫酸五貫、過石五貫、木灰十貫、第三回、硫酸五貫、第四回硫酸四貫。

又農研所の推せんでは次の如くである。基肥 堆肥六百貫、硫酸一貫、過石一貫、塩加八・七貫、追肥、硫酸一五貫を三回に分施。

3 整枝、一般に放任しておいて良い。但し初期に於いて、蔓が伸びるに従つて竹串などをさして、蔓の配置を適当に導いてやる必要がある。特殊な早熟栽培で反当四百本以上も植える場合には南瓜と同様に、蔓を二、三本に整枝し、結果した先を摘み取る場合もある。又蔓の発生、伸長が早く、畝が狭うまつて来る様な場合には、遅く発生する子蔓や孫蔓を早期につまみ取る様にする。(友 寄 長 重)

春は育雛の好時節

― ひなの良否の見分方・衛生・給餌 ―

すべての作物が寒さから解放されて年中でも最も活気を呈するのは春であり、育すうの好時節も亦此の春である。

うしおの寄せるが如く養鶏が盛んになった今日此の頃、町や村ではあつちでもこつちでも我が春をおうかするが如き可れんなひなの鳴声がするの、なんとなくたのしい限りである。

「養鶏の成功は育すうにあり」と言われぬ如く、育すうが上手に出来れば豊稔養鶏は成功したと言つてもよい位に大切なもの

である。

何と言つても三四月頃は繁殖の好期で、雛は活力があつて育て易いばかりでなく、卵価の高い八九月頃 から産卵を始め、翌年の秋まで大体無差羽で産み続けるので、その点からいつても春は育すうの好期と言ふのである。

先ず種卵やひなを購入する場合は優良な種鶏を持つている信用のある所を選ぶ事が大切である。